

故 松山 政義 様 を 偲 び

— お別れの会 —



令 和 6 年 3 月 20 日

於 KKRホテル東京

長崎工業関東支部同窓会

長崎県人クラブ

式次第

1. 開 場 13:30
2. 献 花
3. 開 会 の 辞 長工関東支部同窓会 進 行 永田 昌利 14:00
4. 黙 禱 進 行 永田 昌利
5. 故人の略歴紹介 進 行 永田 昌利
6. 弔 辞 長工関東支部同窓会 会 長 木戸 紀雄
7. 献 杯 長工関東支部同窓会 相 談 役 本田 武利

～ ご 歓 談 ～

8. 追 悼 の 言 葉 長 崎 県 人 クラ ブ 事 務 局 長 藤 島 満 年
長 崎 県 人 クラ ブ 理 事 福 本 吉 郎

～ ご 歓 談 ～

9. 弔 電 奉 読 長 崎 県 人 クラ ブ 常 務 理 事 古 川 彌

～ ご 歓 談 ～

10. 御 礼 の 言 葉 松 山 様 ご 遺 族 ご 子 息 松 山 徹

～ ご 歓 談 ～

11. 閉 会 の 辞 長 崎 工 業 本 部 同 窓 会 会 長 山 田 親 16:00

故 松山政義様 を偲び「お別れの会」ご参列者

《県人クラブ、他 ご参列者》

01	藤島 満年	様	長崎県人クラブ事務局長
02	古川 彌	様	長崎県人クラブ常務理事
03	岸川 悟	様	長崎県人クラブ常務理事
04	弓削 保彦	様	長崎県人クラブ理事
05	福本 吉郎	様	長崎県人クラブ理事
06	平松 勉	様	長崎県人クラブ理事
07	宇田川大江子	様	長崎県人クラブ理事
08	神田 健一	様	長崎県人クラブ理事
09	内堀 勝之	様	長崎県人クラブ理事
10	弓削 義郎	様	長崎県人クラブ会員
11	宅島 正二	様	長崎県人クラブ会員
12	平松 幸雄	様	長崎県人クラブ会員
13	前田 幸司	様	長崎県人クラブ会員
14	芥川(川口)正信	様	長崎県人クラブ会員
15	山本 十一	様	関東島原工業同窓会相談役
16	末吉 正宏	様	長崎南山高校同窓会関東支部会長
17	能勢 正明	様	長崎南山高校同窓会関東支部OB
18	江島 博美	様	長崎南山高校同窓会関東支部OB
19	柴田 みどり	様	長崎南山高校同窓会関東支部OB
20	馬場 徹也	様	佐世保南高校(元東部重工業技術顧問)

《長崎工業本部・関東支部同窓会参列者》

01	山田 親	様	本部同窓会会長
02	北川 友也	様	本部同窓会事務局長
03	木戸 紀雄	様	関東支部同窓会会長
04	本田 武利	様	関東支部同窓会相談役
05	松尾 剛	様	関東支部同窓会相談役
06	石橋 佳之夫	様	関東支部同窓会副会長
07	古賀 民生	様	関東支部同窓会副会長
08	徳田 文則	様	関東支部同窓会副会長
09	山口 和孝	様	関東支部同窓会事務局長
10	樋口 大作	様	関東支部同窓会事務局
11	持木 靖貴	様	関東支部同窓会事務局
12	竹下 正光	様	関東支部同窓会役員
13	前田 利夫	様	関東支部同窓会役員
14	内山 武吉	様	関東支部同窓会役員
15	川口 貞美	様	関東支部同窓会役員
16	西村 寿紀	様	関東支部同窓会役員
17	宅島 幸治	様	関東支部同窓会役員
18	角下 幸雄	様	関東支部同窓会役員
19	中野 誠一	様	関東支部同窓会会員
20	永田 昌利	様	関東支部同窓会役員
21	北 勝巳	様	関東支部同窓会会計

拝復

本日はご多用中にもかかわらず ご参列賜わりまして 衷心より感謝申し上げます

なお 密葬の儀は 近親者にて 相済ませました

また 各方面より 御丁重なる 御弔意を賜わり 誠に有難うございました

略儀ながら書面をもちまして 生前賜わりましたご厚誼 ご厚情に対しまして 亡き父に
に代わり 厚く御礼申し上げます 誠に ありがとうございます

謹白

長崎原爆の体験

新型爆弾投下の下で…

関東支部同窓会相談役

昭和29年造船科卒 松山政義



“あの暑い夏の日…”

昭和20年8月9日午前11時2分、突然！新型爆弾の投下により、長崎の町は今までにない悲惨な状況となりました。空襲警報により多くの人々が外に出ていることが少ないことが幸いであったようですが…

原爆を搭載した米軍機は第1候補地・小倉への3回に渡る投下作戦に失敗。第2候補地・長崎へ向かう日に飛び込んできたのは上空一面に広がる積雲。その時一瞬の切れ目が現れ、そこは目標地点から3キロ離れた「浦上空」でした。



その時私は家の玄関口に居たため、爆風に飛ばされ家の中で気を失っていました。数分経って目が覚めると、そこは、玄関口とは反対側の家中奥にまで飛ばされていたのです。幸い扉がクッションになり助かったのかも知れません。

当時、爆心地から約3キロの西浜町に住んでいたのですが、外は大変な状況になっていました。通り前の銀行の鉄製の扉は熱線でグニャリと大きく湾曲、我が家の2階はスケルトン状態、昼は爆風ですい上げられ、柱しか残っていない状況でした。

幸いにして、家族は1階床下の防空壕に避難し助かりました。後で分かったことですが、祖父は爆風に当たらしく半年後に亡くなりました。もし家族が2階にいたら確実に亡くなっていたでしょう。

“2度目の命拾い…”

2度目に命拾いしたのは、私一人で最後の家の片付けを終え、山の防空壕へ避難するときのことでした。

突然アメリカ戦闘機カーチスが飛来、2回目の飛来で狙い撃ちされたますが、道路脇へ転がり込み助かりました。当時9歳、何故小学生の私が狙われたのでしょうか。考えてみると、日本人は全て背が小さいと思われ、戦闘帽を被り兵隊服でゲートルを巻いていたから軍人と間違えられたのでしょうか。

2度目の九死に一生、よほど運が良いのか、生かされたのか…生き延びました。

“生きる…”

一方、生きて行くためには食料が必要不可欠。早速長崎駅から汽車に乗り、米、サツマイモ探しに行く破目になりました。原爆投下後たった3日しか経っていませんでしたが汽車は動くようになっていたのです。親戚の農家を尋ねましたが、自分たちの食べ物も無いと云われ断られました。あちこち探して歩き回り難しい状況でしたが、どうにか一口分は分けてもらうことが出来ました。

しかしこれではどうにもならない、2日も、長崎駅に向かい並ぶことになる。汽車に乗るまで待たされること4時間、それでも乗れない。しかし世の中は良くしたもので、ある老人が場所をあけてくれました。汽車には乗れましたが、動き出すまで2時間待たされました。知り合いの農家に着いたのは更に2時間後のことでした。それでも1週間分の米と芋を分けて貰うことが出来、助かりました。

途中の悲惨な状況、惨状は言葉で云い表すことが出来ません。ここでは割愛させていただきます。

このわずかな数日間の出来事でしたが、原爆の怖さをつくづくと思い知らされた体験でした。

これほどの体験をしてここまで良く生きてこられたものだと思います。生きる為には前を向いて動かない。あの時の悲惨な状況下での人達が現在の長崎の町を再生させたことは、すばらしい事だと考えさせられます。この平和の願いを後世に伝えなければなりません。このところ体調が思わしくないのですが、出来れば一冊の本にしたいくらいです。

“我が母校長工職員生徒原子爆弾殉難者への追悼”

「我が長崎工業もその当時上野町にあり、校長以下職員22名、生徒210名が原子爆弾により亡くなられて居ります。本校創立70周年記念事業の一環として、現本校の正門脇へ弔魂碑・芳名盤・門柱が移設建立されました。」



我が長崎工業の生徒は優秀です。関東の地に於いて、夢に向け頑張って居られると思います。

現在はコロナ禍で大変な状況にありますが、健康には留意され、是非同窓会活動も利用して下さい。

最後に、長崎工業同窓会会員の皆様が、各業界をリードされますことをお祈り申し上げます。